

次世代育成における農村の役割から

長崎の佐世保で、小学生による痛ましい事件がまた発生した。加害者の少女は、自分のクラスのことを「うぜークラス」と呼び、暴力的な映画に影響を受け、仲良しを殺害するイメージを頭の中で何通りも思い浮かべて犯行に及んだという。インターネットが子どもに与える悪影響がクローズアップされているが、学校や地域社会の大人たちに問題の根があることは明らかだ。子どもが発するシグナルを、私たち大人がしっかり受け止めていれば、少なくとも、“しくなくてもいいところまでさせてしまう”ことは避けられたはずだ。

「うざい」という言葉は、嫌な言葉である。語感がよろしくないし、それを使う子どもたちの表情は醜い。言葉遣いは、その人の心を表す。「うざい」と口にするとき、その人は、他者との関係を断ちたいという気持ちになっている。何か言われること、あるいは、誰かとの関わりを深く考えることに耐えられない精神状態である。他者に対して「ムカつく」状態に自分を置いて関係を断とうとする。それが続くと、それがその人の心の基本状態となり、子どもであれば、凄惨な事件に直結してしまうこともあるだろう。

自分以外の人間、あるいは、自然や社会をよく観察し自分との関係を分析する力が、生きる力の根源であると思う。そして、その力を萎えさせてしまう言葉が「うざい」と「ムカつく」のセットにほかならない。もし、その効き目を知る何者かが、インフルエンザウイルスを撒き散らすように、この言葉のセットを意図的に子どもの中に流行らせたとしたら、それは生物化学兵器よりも性質が悪い。

実は、そうしているのは、テロリストではなく地域の大人ではないかと思う。「無関心」と、そうであることを意識の下に隠そうとする「評論家的態度」に問題の本質がある。

佐世保の小学校の学級崩壊がいつの時点から始まっていたか。担任の教師の対処は適切であったか。あの校長の態度は誠実か。・・・というような批判的な見方をし、加害者以外の犯人を探そうとしている自分に気付き愕然とした。まずは、12歳の少女の命を思い、手を合わさねばならないところである。黒川温泉のホテルの宿泊拒否事件も同じだ。県とホテルに、何対何で非があるかを計ろうとしている自分があった。やはり第一に、断種されたり、墮胎されたりした元患者の方々の無念を思わねばならない。

テレビからは、評論家的な気分が繰り返し伝えられる。子どもたちは、その気分の中で潰れそうになり悲鳴をあげている。芥川賞を受賞した綿矢リサの小説に、その気持ちを読み取ることができる。

大人は、子どもとの関係を無意識に「うざい」として、観察・分析することを止めている。「うざい」を連発する子どもは、他者との関係を正しく観察・分析する力を、いつまでたっても習得できない。

次代を担う子どもたちに、他者との関係を正しく観察・分析する力を付ける取り組みを、早急に始めなければならない。

私は、農村体験は、その点で最も効果的な学びであると考えている。4月の初旬に、私の自宅がある西原村に熊本市内の親子5組を呼んで、「西原村で春を探そう」というミニグリーンツ

ーリズムを実施した。

ポラロイドカメラを持って草原を歩き、春の訪れを親子で写真に撮るといものである。子どもは一生懸命にファインダーを覗き、草原の中に春の息吹きを探そうとする。その様子を見て母親は、わが子の心の動きを感じる。「今まで見たことのない子どもの一面を知った」というのがある母親の感想である。

このほかにも、わが家の鶏にエサを与えたり、抱いたり、産んだ卵を使ってホットケーキを作ったりした。子どもたちは皆、生きいきしていた。

命あるものを育てる経験は大事である。野菜や家禽を育てるには観察力が必要であり、育ちが悪ければ、どうしてだろうと原因を分析する。良い作物を作るには、人間が作物に対して良い働きかけをするほかはない。その経験から得た感性と忍耐力は、自分と自分以外のあらゆるものとの関係を考えることに生かされる。

県内各地で取り組みが始まっているグリーンツーリズムは、単に地産地消の経済効果を狙うだけでなく、「農村が次世代を育てる」という使命感を持つべきだ。

といっても、特別に難しいことをする必要はない。子どもと一緒に畑仕事をし、野山を歩けばよい。大事なことは子どもが感じとってくれる。そして、そのことを確信している大人と一緒にいることこそが、子どもにとって最良の教育になる。ならば、行政は、教育に係る予算を直接農村に投入してもよいのではないだろうか。あるいは、農政の予算の中に次世代育成を目的とした事業費があってもよい。その上で、小学校区や集落などの小地域を単位にした地域づくり団体が、縦割りの予算を統合して効果的な活動を展開することが望まれる。

数は少ないが、県内にも、実際にそうした活動をする団体が出てきた。補助金へのアプローチが積極的で、行政や議員を動かして新しい事業を生み出すロビイストのような立ち回りができる人材が散見される。「地方分権」ではなく「地域分権」という言葉を耳にするようになったが、地域づくり団体の役割や権能を明確にし、地域づくりを次のステージへ移行する時期に来ているように思われる。その道筋を明示できたなら、協働の姿もはっきりとしてくるのではないだろうか。

お知らせ ニュースレター「船頭さんの会ナビゲーター(略して船頭“山”ナビ)」をお届けします。定期的に、エッセーと地域づくりに関する技術講座の2つのテーマで情報発信いたします。“好”読ご希望の方は(希望しない方も、その旨)【adt52200@rio.odn.ne.jp】までメールください。

募 集 子飼商店街内の弊社事務所にて、レトロ座Cキュービック会員を募集します。レトロ座とは、RETRO=Regional Trading Organizerです。Cキュービックは、City Communication Center のことです。小学校区や集落を単位に行われている地域づくりを、子飼商店街の買い物客や大学生に知らせるための、窓口業務を代行するものです。例えば、農家の土蔵を改造してギャラリーにした。しかし、使ってくれる人が見つからない。そのような場合に、大学のサークル、PTAの主婦グループなど、使ってくれる人と結びます。あるいは、子飼商店街で日曜朝市を出したい。そのような企画の応援をします。事務所内に専用のパソコンを設置しています。CD-Rなどの媒体で、地域資源や活動を紹介する情報をお寄せください。事務所内で、様々な人に見てもらいます。ポスターの掲示、チラシの配布もOKです。当面実験的に無料でサービスし、将来有料化する予定です。ちなみに、子飼商店街は、昭和レトロの「レトロ通り」という愛称で売り出そうとしています。【〒860-0853 熊本市西子飼町 10-27 (有)トハウス TEL096-341-1231】